

分科会の名称 里山と芸術



委員名と役割分担

分科会代表 : 小堀 修司

副分科会代表 : 上島 浩美

記録 片岡大樹

実行委員 : 栗原裕治、瀧田強志、陰山祐一、小林 正幸、高橋 小織、大司美智子、
山田聖子、斉藤えりか、大島賢一

タイムテーブル

第1部 ワークショップ

10時40分・楽器制作&ワークショップ

11時40分・グループ毎の発表、2グループ合わせたセッション

12時30分・お昼休憩

13時30分・楽器制作ワークショップ

第2部 ラウンドテーブル

13時50分～ 感想を発表、「もう一度実施できるとしたらどのようにしたいか?」、「里山と芸術はどのように関わりうるか」

* 予定では午前中がワークショップ、午後がラウンドテーブルでしたが、予想以上のワークショップの盛り上がりがあったため、スケジュールを変更しました。

出席者数 27名

基調講演等の内容

[第1部 ワークショップ]

午前中と午後の前半は、参加者が2グループに分かれて、竹を利用した楽器づくりと、つくった楽器を使用したグループごとのパフォーマンスを行いました。主に作られた楽器は横笛、鳥笛、太鼓などで、パフォーマンスでは、ベースとなるリズムを1人が刻み始め、そこに他のメンバーが自由に加わっていくという方法で作曲しました。晴天にも恵まれ、楽器制作と即興の曲づくりは非常に盛り上がり、充実した時間を過ごす事ができました。「音が出た!」と喜ぶ姿が印象的でした。

[第2部 ラウンドテーブル]

午後の後半からは、ワークショップの感想をもとに、「里山や自然に関わっていくためのきっかけとしてのアート」をテーマにラウンドテーブルを行いました。次に実践するならどのようにしたいかという事から、分科会で出会った方々の今後につながる話し合いをしました。「竹や木材をとりによく事から、やってみたい」「里山の中で演奏してみたい」といった内容的なアイデアから、「千葉アートネットワーク・プロジェクトという団体に加わってみるのはどうか」という具体的な立ち上げ方法まで様々な意見交換をする事ができました。

分科会の結論

いわゆるディスカッションという形をとらなかったのが、明確な結論というものは出ていません。しかし、ワークショップ体験を通して、芸術は里山と関わっていく上で、楽しく、またそれ故に問題提起的な方法の1つとして有効であるという事が確認できました。そして、次への活動を目指した団体・個人の結びつきが生まれました。

分科会の課題

最も重要な成果であった出会いを次へと生かし、里山、自然と関わった実践を生み出していく事が各参加者に求められる。

分科会の提言

課題を実践していくに当たり、行政の方からの多面的なバックアップが必要。

他の分野から里山に関わる際にも1つのアプローチとして芸術を認識して頂き、新たな提携関係などが生まれることを望む。

反省等

全体的にスケジュールがタイトすぎた事

参加者数が少なかった事 (= 広報不足)